

令和6年度静岡市協働パイロット事業 企画提案書

団体名：NPO 法人 B A S S p l u s

1 事業のタイトル

放任竹林を活用したレッパーくんのもぐもぐサポートプロジェクト

2 背景・現状 (事実に基づきデータなどを用い、現在の静岡市にどのような問題があるのかを明確に記載してください。)

現在、市内では放任竹林が拡大しており、生物多様性の低下や自然災害の誘発等、多方面に悪影響を及ぼしている。(森林簿における竹林面積(参考値) H29: 約 745ha⇒R4: 約 873.5ha)

市内各地に放任竹林を整備するボランティア団体が点在しているが、活動資金の不足や担い手不足により活動の継続が危ぶまれている。

放任竹林の大部分が民有地であることから、整備ボランティア団体による整備が今後も主体となってくる中で、持続可能な活動を実現するためには竹の経済的な価値の創出は必要不可欠となってくる。

3 目指す状態・成果 (現状に対して、どのような状態になっていることが社会の理想的な姿か、明確に記載してください。)

【現状】

市内の放任竹林が拡大している。

放任竹林が拡大することにより、主に以下の3点のような悪影響を及ぼす。

⇒①生物多様性の損失 ②自然災害リスクの増大 ③水源涵養機能の低下

【理想】

・竹林整備団体の持続可能な活動が実現している。(活動資金や担い手の確保ができています。)

・放任竹林問題が広く周知されるとともに、その対策と、竹の需要供給システムの充実と拡大

⇒良好な里地・里山の保全と再生(竹林の適正な管理)

4 社会的課題 (「2 背景・現状」と「3 目指す状態・成果」を比較し、目指す状態に至らない理由や問題点を明確に記載してください。)

・放任竹林問題自体が市民に広く周知されておらず、竹林整備の必要性を知らずに放置されている。

・国産の竹需要の低下により所有者が管理を放棄したり、不在地主が増加している。

・竹林を整備している整備団体の活動が持続可能な仕組みになっていない。

(活動資金不足、担い手不足等)

・竹の経済的な価値や利活用方法が限定的であり、竹林整備への積極的な参入が見込めない。

(民間事業者、土地所有者等)

・竹の需要が創出された際の供給システムが未構築である。

5 事業の概要（「4 社会的課題」で掲げた課題の解決をするために、どのような事業を提案するのか及びその成果指標について、「3 目指す状態・成果」の内容を踏まえて記載してください。）

市内の竹林整備団体が伐採した竹の枝葉を日本平動物園のレッサーパンダの飼料として活用する。

竹林を整備する中ででてくる竹の枝葉は、現状活用方法がなく処分されるのみである。その枝葉を日本平動物園のレッサーパンダの飼料として活用することで、竹（枝葉）の新たな経済的な価値の創出を生み出すとともに、動物園側に買い取ってもらうこと、及び民間からの資金調達によって、竹林整備団体の活動資金を生み出す。

日本平動物園は市内の観光名所として多くの人が訪れる施設であり、特にレッサーパンダは日本平動物園が全国の繁殖管理を行う「レッサーパンダの聖地」となっているため、注目度も高く、放任竹林問題を広く周知するきっかけづくりにもなる。

加えて、レッサーパンダの飼料（竹の枝葉）は市外業者から購入されており、飼料代も高騰している。市内で問題化している放任竹林を活用することで、飼料の地産地消及び飼料代の軽減に寄与する。

レッサーパンダの飼料と放任竹林整備の好循環（地産地消）による価値共創を目指していく。

6 市と協働をする理由（団体独自で行うのではなく、市と協働することが必要な理由や、市と協働することによって得られる効果等を記載してください。）

【市と協働する理由】

行政と連携することにより、当団体のみでは困難な市内各地に点在している竹林整備団体への協力依頼や連絡調整が可能となり事業規模が一団体単位から市内全域の団体へと広がる。

【市と協働することによって得られる効果】

市内の観光名所である日本平動物園のレッサーパンダの飼料として活用することで、市民からの注目度も高くなり、放任竹林問題や竹林整備団体の活動を広く知ってもらうきっかけづくりとなる。

本事業が竹利活用の好事例となることで、市が抱えている地域課題と竹林の利活用の水平展開へと新たに発展していく可能性がある。

7 団体の担う役割

① 日本平動物園との連絡調整

- ・竹の枝葉の持込日時や持込量等の連絡調整及びスケジュール化
- ・竹の枝葉の搬入団体との対応処理

② 竹の枝葉の供給システムの構築

- ・事業開始当初は、協力していただく竹林整備団体と電話連絡による日程調整を行っていくが、将来的にはSNS等を活用したシステム構築とネットワーク化を実現する。
- ・システムの運用にむけた関係団体との情報共有や説明会を実施する。

③ 各協力団体との連絡調整

- ・竹の枝葉の持込日時や持込量等の連絡調整及びスケジュールの共有
- ・竹の枝葉の持込に応じた動物園側との対応処理

※本事業の自立運営を目指し、民間企業の協力を得る仕組み作り、企業支援企画を検討する

8 静岡市に担って欲しい役割

① 日本平動物園

- ・竹の枝葉の受入
- ・当団体との連絡調整（竹の枝葉の受入日時や受入可能量の共有）
- ・竹の枝葉に関する搬入条件の設定と協力
- ・本事業の積極的な周知活動、企業支援企画への協力

② 環境共生課

- ・事業のブラッシュアップ（関係主体の意見集約や事業の見直し提案等）
- ・参加団体へのサポート
- ・各関係主体との連絡調整（日本平動物園、当団体、協力団体等）
- ・本事業の積極的な周知活動

9 事業計画・実施スケジュール（協働パイロット事業で実施する事業のスケジュールを記載してください。2年間にわたる事業を検討している団体は、2年目の計画についても記載してください。）

令和6年 6月～	○試験的な笹の提供（竹林整備団体×環境共生課×日本平動物園） ○民間企業への支援企画立案、支援金募集（NPO 法人 BASSplus）
令和6年 7月～	○協力団体の募集（環境共生課） ○事業実施説明会の実施（竹林整備団体×環境共生課×日本平動物園） ○竹の枝葉の搬入開始（竹林整備団体×NPO 法人 BASSplus×日本平動物園） （夏場：月1回程度（6月から9月）、その他：月2回～4回程度） ○スケジュール管理システムの開発または導入
令和6年 11月	○意見交換会（NPO 法人 BASSplus×環境共生課×日本平動物園） ⇒来年度以降の事業実施にむけた課題の抽出や事業のブラッシュアップ
令和7年 2月	○成果発表&意見交換会 （竹林整備団体×環境共生課×日本平動物園×支援企業×NPO 法人 BASSplus）
令和7年 3月	○委託完了報告（NPO 法人 BASSplus） ○協力団体の募集（環境共生課）
令和7年 4月	○パイロット事業継続申請（NPO 法人 BASSplus） ⇒意見交換会等をもとにした事業の仕立て直し
令和7年 5月	○事業実施説明会の実施（竹林整備団体×環境共生課×日本平動物園）
令和7年 ～	○民間企業への支援金継続依頼、新規募集（NPO 法人 BASSplus）
令和7年 7月～	○竹の枝葉の搬入開始（竹林整備団体×NPO 法人 BASSplus×日本平動物園） （夏場：月1回程度（6月から9月）、その他：月2回～4回程度）
令和7年 11月	○意見交換会（NPO 法人 BASSplus×環境共生課×日本平動物園） ⇒来年度以降の事業実施にむけた課題の抽出や事業のブラッシュアップ
令和7年 2月	○成果発表&意見交換会
令和7年 3月	○委託完了報告（NPO 法人 BASSplus）

通年：企業の支援金に加えクラウドファンディングの活用等、安定的な財源確保を模索する。

10 協働パイロット事業終了後の展望・今後の活動展開（協働パイロット事業終了後にどのように事業展開をしていく予定か記載してください。）

事業終了後も本事業は継続的に実施していく予定である。パイロット事業を活用する2年間で本事業を市内外に広く周知することで、賛同する市民・支援企業・竹林整備団体を集めていく。

パイロット事業終了後の事業運営費については、竹の枝葉の買取に加え、企業からの支援金等を活用して、安定的な事業運営が可能な仕組みづくりを構築する。

担い手については、市内の竹林整備団体が主体となり、当団体がハブ的な役割を担いながらネットワーク化されたシステムの中で安定的な竹の枝葉の供給を行う。枝葉の供給以外にも竹の需要が高まった際には、本事業で構築されるシステムを活用して、安定的な供給を実現させる。

将来的には、行政や民間企業と連携をし、飼料としての枝葉の活用以外にも、竹林整備団体の活動資金や民間企業が参入してくるような竹の経済的な価値を創出する。そして安定的な需要と共有システムが構築されることで、市内全域の放任竹林整備が進んでいくことを目指していく。

11 実施体制及び主要スタッフの経歴

【活動主体】

「特定非営利活動法人B A S S p l u s」（設立／2023年3月3日）

2020年から、「静岡放置竹林竹炭プロジェクト」として、代表理事の知久昌樹が活動開始。葵区新聞の炭焼き窯「工房炭俵」（金丸正江さん）のフォローをし、新聞の放任竹林の伐採と竹炭制作を開始、徐々に仲間を増やしてきた。特定地域の課題解決としての竹林整備ではなく、地主からの情報で伐採エリアを固定し、最大で同時3ヶ所における伐採と、伐採竹の活用を模索してきた。

その後、2023年3月に静岡市内を中心に管理不足により荒廃が進行している放置竹林に対処するため、「行政、地域住民、森林・竹林所有者」および静岡市内で竹林伐採に関わる個人と協力し、所有者だけでは管理できない竹林を適正に管理することや竹資材の多様な利活用方法を構築することで社会貢献となり静岡市の持続可能なまちづくりとやまづくりを行い、地域社会全体の利益に寄与することを目的として、「特定非営利活動法人B A S S p l u s」を設立した。

【主要スタッフ】

○代表理事 知久昌樹（ちくまさき）

静岡新聞社・静岡放送取締役地域ビジネス推進局長、執行役員デジタルビジネス局長を経て、退任。現在、株式会社SBSプロモーション専務取締役。竹林伐採作業を始めたのは、静岡新聞社・静岡放送の取締役時代。

○理事 浅沼由紀乃（あさぬまゆきの）

フリープランナー。県内外を問わず、様々な行政・企業のマーケティング・事業のプランニング及び企画書制作、事業制作を請け負う。一方で、グルメインスタグラマーのとしての顔も持ち、フォロワーは13000人を超える。

12 その他アピールしたいこと（団体の専門性や先駆性、創造性など、特に団体としてアピールしたいことを記載してください。）

団体名の「B A S S p l u s」（ベースプラス）の「B A S S」は、Bamboo And Sea Shizuoka の頭文字から取りました。B A S S は音楽の低音部分を担当する楽器と同じ綴りです。音楽の根底部分を支えるベースのように、竹と海をきっかけとして、静岡の環境保全・地域活性の縁の下の力持ちになりたいという思いも込めています。さらに、「竹害」という言葉があるほど、竹は煩わしいと思われる存在ですが、それをプラスの力に変えていくという意志をまさにプラスして表現した名前です。

活動しているメンバーは 30 代から 70 代まで幅広く、現在約 20 人。現在の伐採エリアは 2 カ所で、メンバーはほぼ社会人のため、週末を中心として活動しています。

ただ、その活動は自治会など特定地域課題としての竹害として取り組んでいるわけではないので、伐採後の竹の活用や、伐採エリアの活用をイメージして取り組むようにしています。ですから、竹イノベーション研究会などの組織にも所属をして、全国の竹利活用の例を調査しながら、実際に利活用実験をしたり、竹チップの利活用のアイデアを地元企業と相談をしたりという活動もしています。また、活動の原点でもある新聞の竹炭窯で制作した竹炭は、島田の大村屋酒造という酒造会社の原料水の濾過に利用いただいております、同酒造は数々の賞も受賞なさっています。

加えて、本業がメディア、広告代理店、マーケティングプランニングという分野にありますので、新たな企画開発や、企業との連動などを得意としています。本企画につきましても、動物園の限られた予算と、市内の竹林伐採団体との作業コストを見据えたときに、民間企業の協力を得て通期運用することを最終目標として置くことができるかと思います。また、スケジュール管理などの I T 化を進めるにあたっても、これまでの様々な知見がありますので、ひとつひとつの業務を丁寧に進めることが可能です。

本企画を通じて、放任竹林の課題の認知拡大が見込まれ、さらなる理解者（活動参加者、支援者、自治会など）を増やすことができれば、そのネットワークの拡大で放任竹林対策も広がることかと思えます。そして、なによりレッサーパンダの飼料の安定供給が低コストで実現できる可能性は高くなるはずです。